

# 字連会報

第 56 号

平成 29 年 10 月 15 日



## 熊本地震後記

草場 辰哉

前回の55号で「熊本地震私記」を掲載していただきました。地震から、約1年半が経過しましたので、その後を記載します。

## (診療記録)

2016年4月（地震当月）は約25%の受診患者数の減少だったが、5月より例年並みの数字に戻った。さて、ここ1、2カ月（7月、8月）であるが、受診患者数の例年よりの1割ほどの増加。地震医療費免除が9月終了するための、駆け込みによるものか？他科の先生方、如何でしょうか？

## (病院外部被害)

昨年晩秋、地震後半年、宇土市水道局より漏水（例年の約2倍）の指摘あり。

業者に相談、地震による水道管の破損と考えられた。病院敷地のどの位置の水道管なのか探索が困難極めたが、どうにか破損場所確定して、改修に至った。尚、業者の証明書提出し漏水水道料金数か月分は市から返還があった。地震保険の対象であったが、工事費のみの支払い漏水管検索費は対象外であった。

## (病院内部)

いまだ、業者多忙のため改修できていないが、診療、安全に問題ないため業者待ちである。

## (人的被害)

私の見た限り、精神被害、健康被害なく、職員は元気に通勤している。家屋全壊の職員も新築の予定とのことで、安心した。

## (地震保険)

レセコンソフト、水道管破損部位探索費用は出なかったが、それ以外は全額補償いただいた。「できるだけ支払う」という感あり、ありがたい。熊本に地震なんか…と思っていたが保険加入は幸いだった。

## (自宅)

地震直後の荷物、書籍、置物など散乱状態は脱したが、まだまだ彼方此方散らかっている。休日に片付ける気力がない。

(診療疲れと妻には言い訳してるが、早く片付けないと…)

## (世間)

最近になり、あちこち更地が目立つ。地震被害家屋解体工事に1年以上の時間を要したのでしょうか。地震前の通勤経路の橋がまだ不通のため、いまだ遠回りの通勤経路である。地震後の多様な不便を抱えながら、県民の方々は日常を暮らしておられるのではないかと思う。

## (思い)

もう2度とあの規模の地震はいやだが、自然災害は容赦なくやってくる。防災意識を常に忘れないように、自分に言い聞かせている。



ニッコウキスゲ

## 熊日夕刊

増田 哲哉

熊本出身の作家、梶尾真治さんの「黄泉がえり」は2000年10月に出版されているようです。原作も読み、竹内結子さん、草彅剛さん、柴咲コウさんらが出演された映画も観ました。しかし、原作に熊本地震を予言するような内容があったことは全く記憶に残っていませんでした。布田川断層が危ないことを、そのころから多くの人が認識していたのかもしれません。色々な災害が多くなってきた昨今、きちんとした情報を正しく捕えるアンテナを持っておきたいと思います。

さて、7月に梶尾さんの「黄泉がえりagain」が熊日夕刊に連載されることを知り、初めて夕刊を取ってみることにしました。週一回土曜日だけの連載ですが新しい物語がどう展開していくか楽しみです。夕刊は紙面は少ないものの結構内容があり今のところ満足しています。猫好きの私には湯島の猫たちを紹介する「猫島ありのまま」のコーナーも魅了的で、釣りで沖合には行ったことがあるのに上陸したことがない湯島に一度行ってみたいと思っています。

罹災診療をもうすぐ終えるにあたり  
心に感じること

村上 茂樹

昨年4月の震災以降1年5ヶ月続いた罹災診療も今年9月末で終わりを迎えます。思えば、昨年4月16日の震災の当日は開院20周年にして初めて休診体制を取りましたが、翌週4月18日からは朝6時から診療をお待ちになる患者様をお迎えして診療と小手術を早々に開始し、4月26日からは手術室内での白内障手術及び緑内障手術や硝子体との同時手術も開始し、今日までお蔭様で無事に診療と手術を継続しています。

また、この2度に渡る震度7の激震の後も2,000回を超えて遷延する余震と共に、さらに追い打ちをかける様な夏の集中豪雨により、宇城地域が甚大な水害に襲われる大変な状況の中で、「もし、この震災と豪雨を無事に乗り越える事が出来たら、今後の折り返しの21年間は今までご支援頂いた当地域の方々への恩返しの為に、全身全霊で診療と手術に精進していく！」と決意し、この誓願を決して忘れないようにと心に誓ったことを昨日の様に思い出します。そして、震災が一段落した後、医療費免除の罹災証明を持参して来院される多くの患者様の外来診療と共に白内障手術及び緑内障や硝子体との同時手術、そして、緑内障のSLT（選択的隅角光凝固術）や眼底疾患に対するマルチカラースキャンレーザー法による網膜光凝固術に加え、眼瞼の下垂手術や皮膚腫瘍や結膜腫瘍等の多くの小手術の処置を朝から夜の終了時までずっとノンストップで精進してきました。

人々、開業当初からの患者様を全身全霊で診療するという特攻精神を常に心に描きながら、日々の朝夜の走り込みと体幹トレーニングで心身の鍛錬をすると共に職員全員が一丸となった協力体制とサポートのお蔭

で、今まで無事にこの激しい罹災診療を続けて乗り越えることができたことに心から感謝する次第です。

この長期の罹災診療を健康で無事に乗り越えていく為に、開業以来の日々の朝夜の走り込みと共に体幹トレーニングも強化して、体脂肪率も13%台で、BMIも19を維持しています。

そして、この激しい罹災診療を体験しながら、自分なりに時間の管理や段取りの重要さを実感するようになります。朝の5時半起床と温浴後の朝の走り込みから生活リズムを整え、外来診療でも日本睡眠学会の坪田聰先生の1分間瞑想法と独自で考案した血流改善体操を実践し、さらに免疫学の権威の順天堂大学医学部・奥村康教授の「1日に90分笑って免疫力を上げる法」も日々続け、帰宅後も同大学・小林弘幸教授が監修する「自律神経を整える音楽」を繰り返し聴くように努め、心身の体調管理の維持に努めてきました。この1年5ヶ月の罹災診療期間は、自分にとっては日々朝から夜までノンストップの診療と手術、処置を全身全霊で続けてきたとても濃密な時間の日々であったと感じています。

医師となって30余年、勤務医時代及び開業21年間の中でも最も多忙を極めた時期とも言えますが、その中で有り難い試練を頂き、より良い開業医となる為の修行の中で素晴らしい智慧も頂いたと思っています。また、人生面でも奇跡的に最高に幸せな人との出会いやとても幸福な体験も数多く得ることもでき、人生では地位や名譽などよりももっと素晴らしいものがあることを改めて心に感じました。

今後の罹災診療後は少しはゆとりのある日々の診療と手術を楽しみながら、診療面でも基本に立ち返り、成書も繰り返し再度熟読して少しでも多くの診療の知識と技術を体得し、昨年の震災後の絶えまぬ余震とうち続く豪雨の中で誓った地域への恩返しの誓願を実現できる様、日々の健康に努め、自分なりに努力を続けていきたいと思っています。

### ジイジ、バアバ、出番ですよー

—— 山本 敏廣

「もしもし、じいじ？お魚食べたよ！」

「自分で釣ったお魚はおいしかったろ？」

「うんカレー味のが一番おいしかった」

家に帰り着いたとたん5歳になる孫からの電話だった。

熊本に来た折、柿原のマス釣りに連れて行った。それ以来魚を釣り上げた時の感触が忘れられないらしく、息子に釣りに連れて行ってとせがんでいるようだ。近くに海があるので竿や仕掛けを買い揃えてやったのだが、あまり釣りの経験がない息子は億劫がって連れて行こうとしない。夏休みに入ると「お爺ちゃんと行きたいんだって」と押し付けてきた。仕方なく7月の終わりに釣りのまねごとをする事にした。

朝6時、近くの釣り具屋で餌の青虫とコマセ用のアミを買いつめ出発。本格的な釣り装備で海釣りセンターの開場を待っている人々を横目に、釣具屋のお兄さんが、釣れる保証はないけどトイレもあるし安全ですよと教えてくれた今津港の堤防に向かった。

堤防先端にはすでに3組ほどの家族連れが竿を出していた。竿が届かない程度の距離を置き場所を確保した。コマセをまくと海の色が変わるほど小魚が群れてくる。孫はすぐにハイテンション、早く早くとせつづいてくる。竿にスピニングリールを固定し道糸にアジ用のサビキとコマセ籠を取り付け完成。コマセのアミをかごの中に入れ、孫に竿を渡し撒き餌で集まった小魚の中へ落とし込ませた。2本目の仕掛けに取り掛かるや否や「釣れたよー。」振り向くと頭の上を小さな魚が右に左に宙を舞っている。竿を降ろさせると7~8cmの小さな鯛の子が掛かっている。孫の初釣果に相応しいサイズだ。その後鯛の子に混じって17~8cm程のサバも釣れ出した。投げ釣りの方はというと根掛かりが多く息子が釣ったキス1匹に終わった。

2時間もすると釣りに飽きたようで、バケツの中の魚をおもちゃにして遊んでいる。孫も十分楽しんだようだし、日差しも強くなってきたので納竿することにした。釣果は小鯛15、6匹サバ7、8匹フグ1匹と初めてにしては上出来であった。まだ元気で泳いでいたフグを海に放し帰路に就いた。

家に帰ると「ママ沢山釣れたよー」と妻と嫁にバケツの魚を見せてている。妻が「この小鯛は料理できないから捨てよ。サバは食べれそうだから3枚におろしてフライにでもしてあげれば。半分はカレー粉をまぶしてカレー味にすると子供が喜ぶかもね。」と嫁に言うと「えー魚を3枚に下ろすんですか？私魚をさばいたことありません。はらわたの取り方もわかりません」と困惑気味。「そうよねー、今の若い人たちは家で魚をさばくことはないものね。私もお父さんが患者さんからお魚をもらってくるから仕方なく覚えざるを得なかつたよね。」と言いながら、出刃包丁も刺身包丁もないキッチンで調理を始めた。嫁に、はらわたの取り方や3枚に下ろす時の包丁の入れ方を教ながらさばき終えると、布巾の上にサバの片身がきれいに並んだ。「じゃあママにフライにしてもらって沢山食べてね。」

じいじ、ばあばの役割終了とばかりに早々に退散することにした。息子夫婦の「今日はお世話になりました。」の言葉に、「もう少し成長してねパパ、ママ。」の思いを飲み込みつつ、まだまだ居場所があることに安堵し、次の出番を楽しみに家路についた。

### 最近思うこと

—— 庄野 弘幸

済生会みすみ病院の院長になって、院長研修会、トップマネジメントのセミナーにも参加してみました。いろいろな病院で、改革に取り組まれた事例なども聞かせていただきました。また、今回、宇城地域の地域医療構想調整会議に参加させていただくことになりました。

国は、都市部と地方とで医療介護の情勢は異なるので、それぞれの地域ごとに今後の在り方を考えなさいと宿題を出していると思いますが、いろいろ話を聞いていると、国からの話がそのまま県、市町村へと伝達されているだけで、市町村独自の話はあまり聞こえて